

TAMA CINEMA 通信



TAMA CINEMA FORUM

TAMA映画フォーラム実行委員会 〒206-0025 多摩市永山1-5 ベルブ永山(永山公民館内)
代表:042-337-6661 直通:080-5450-7204 <http://www.tamaeiga.org/>

6月特別上映会 6/7  ベルブホール (ベルブ永山 5F 京王永山駅・小田急永山駅下車徒歩約2分)

negative: nothing ネガティブ：ナッシング

全てはその一歩から

- ① 11:00 - 12:18
- ② 13:30 - 14:48
(14:48 - 15:20 ヤン・クヌーセル監督トーク)
- ③ 16:00 - 17:18
(17:18 - 17:50 ヤン・クヌーセル監督トーク)
- ④ 18:30 - 19:48



東日本大震災後、日本を
勇気づけたいと徒歩で
日本を縦断したスイス
人男性の記録映画

チケット

前売 大人(13歳以上) 1,000円
当日 大人(13歳以上) 1,200円
子ども(4~12歳) 600円

(TAMA 映画フォーラム支援会員、障がい者と
その付添者1名は当日600円です)

- * 全席自由席・各回入替制
- * 開場は各回15分前
- * スケジュールは変更になる場合があります。

特別上映会特設ページ

<http://www.tamaeiga.org/special/nn/>

作品介绍

スイス人のトーマス・コーラさんもあの震災で人生が変わってしまった人の一人です。彼は今こそ大好きな日本に恩返しをしようと思立ちます。

北海道宗谷岬から鹿児島県佐多岬まで2900キロの道のりを徒歩で旅する彼の周りには人が集まります。最初は菅笠をかぶった外国人が歩いているという物珍しさだけだったかもしれませんが、ただ、ひとたび彼の話の聞いてしまうと、彼を応援する気持ちがふつふつと湧いてくるのです。そして、彼に感化されいつのまにかこちらが元気になってしまうのです。

地元の人や新聞社、果ては日本政府をも巻き込みながら、彼が歩んだ一歩一歩が、彼が歩いた道程が、彼のポジティブな言動と毎日書いたブログが、彼の周りに集まった人々を変え、やがて世界を変えていきます。

たとえ小さな声でも真摯な態度でポジティブに伝え続けることの大切さ。その声に耳を傾ける人々の美しさ。この映画が新たな一歩を踏み出すきっかけになればと思います。

今回の特別上映会では、トーマスさんの旅に同行したヤン・クヌーセル監督をゲストにお招きしてトークも行います。

(遠藤弘樹)

[トークゲスト] ヤン・クヌーセル監督

兄であるステファンと共に本作の監督を務める。ニュースブログ asienspiegel.ch を立ち上げ、日本、中国、韓国の最新ニュースを配信する。ジャーナリストとしては長くスイス大手紙 Tages-Anzeiger オンラインの報道部副部長として、日本を始めとする東アジアに関する記事に長けていた。

チューリッヒ、大阪の大学にて日本学を主専攻、政治学ならびに東アジア美術を副専攻として修士課程を修了。

5月6日 火祝
特別上映会レポート

ある精肉店のはなし

ゴールデンウィーク最終日となった5/6（火・祝）に特別上映会を開催いたしました。上映作品は『ある精肉店のはなし』です。

この作品は、瀬瀬（はなぶさ）あや監督の長編ドキュメンタリー第2作目となる作品で、大阪府貝塚市で7代にわたってつづく、北出精肉店の物語です。前作『祝の島』での山口県・上関原子力発電所建設問題に揺れる住民たちにつづき、当作品では被差別部落、屠畜など難しいテーマに触れつつも、牛の肥育から精肉まで、いのちに温かく寄り添いつづける一家の生業、生活を丹念に描いています。

今回は作品上映に加え、より印象的な上映会にしようとのことを企画いたしました。一つは初の試みとなる「感想共有の時間」です。実際にご覧になったお客様方と実行委員が作品について話す場となり、お互いに新たな知見、視点を獲得する絶好の機会になったと感じました。もう一つの企画、作品プロデューサー・本橋成一氏の写真集『屠場ととば』からのパネル展示は、被写体、またモノクロのインパクトがとても印象的でした。

形は様々ではありますが、差別は私たちのくらしのなかに表れ、横たわっています。私たちが知り、学び、何かを心に留める機会が何より大事なことではないかと改めて感じました。

少々雨模様となる時間もありましたが、天気もなんとか持ち、お子様を含むたくさんのお客様にご来場いただきました。実行委員一同胸をなでおろしております。本当にありがとうございました。（橋口聖）



「感想共有の時間」の様子



実行委員のおすすめ映画コーナー *****

『世界の果ての通学路』（パスカル・プリソン監督 / 2012年）

ケニア、インド、モロッコ、アルゼンチン、世界の荒野や山岳といった自然のままの辺境を通学路とする子供たちを追った、フランスのドキュメンタリー映画。12年をかけて制作した『マサイ』（2003）のパスカル・プリソン監督がロケハン中に、マサイ族の若者が2時間走って通学する姿を観たことが今作のきっかけだそう。

子供たちは家の仕事を手伝い、大人が大袈裟でなく安否を祈るほど長く険しい道程を通うため、朝も早い。障害は、野生の象やキリン、起伏の激しさ、ハプニング…。

時に緊張に険しくなる表情、兄弟や友達で助け合い、機転をきかせ、方角も見失わずに前へ進む。子供同士のお喋りや、生きいきした大きな瞳が皆、愛らしい。学校に着くまでの大冒険、くたくたに疲れて倒れこむこともなく、子供たちは朝礼の旗の係をし、授業に臨む。

日本は義務教育があり、識字率はほぼ100%。ほとんどの通学路は舗装され、電車やバスも使える。その恩恵を活かしているだろうか。学校教育期間を終えた大人は尚更、時間割も通学路も自分で決めて、生きている限り学んでいかなければと、自戒を込めて。（服部裕美子）



実行委員のおススメ映画コーナー

ここでは実行委員のおススメ映画を紹介いたします。

『サラの鍵』（ジル・パケ＝ブレネール監督 / 2011年）*****

1942年、フランスで実際に起きたヴェルディブ事件（ナチスの占領下にあったフランス警察によりユダヤ人が検挙され強制収容所へ送られた事件）を題材とした映画。

事件に巻き込まれる主人公の少女・サラは、連行される際、咄嗟に弟を納戸へと隠しその鍵を持ったまま家を出てしまう。自分と約束したのだから弟が納戸から逃げているはずがないと信じるサラは、生死を問われる極限の状態にあっても家に戻ることを諦めない。一方、現代でジャーナリストとして働くジュリアは、偶然サラの存在を知り、彼女の運命を追っていくことになる。

物語はこの二人の女性の話を交互に映しながら展開していく。前半では事件の悲惨な光景が描かれ胸が苦しくなる場面も多いが、ジュリアがサラと事件を追う様子を織り交ぜることでぐっと物語に引き込まれていく。

見どころはサラ役を務めるメリュジーヌ・マヤンスの演技。恐怖、怯え、驚愕、疑心…劇中で様々な表情を見せるが、とても10歳前後の少女のものとは思えない。彼女の眼差しに何度も心を揺さぶられた。

戦争の悲惨さだけでなく、生き残った者の苦しみ、またそれを知らない者の罪深さを訴える作品。(小林真実)

『ネクスト・ゴール！世界最弱のサッカー代表チーム0対31からの挑戦』（マイク・ブレット、スティーヴ・ジェイミソン監督 / 2014年）*****

2001年、W杯予選にて0対31の史上最大得点差で大敗した世界最弱チーム、アメリカ領サモアを追うドキュメンタリー作。アメリカ領サモアではサッカーで生計を立てられるわけではない。彼らはアマチュアながらにして国の代表だ。

0対31。聞いただけでも悪夢であることは想像出来るが、31点入れられたキーパーの言葉を聞くと試合中だけでなく試合後まで続く“最弱のレッテル”が痛い。が、それでも諦めない、更に上を向き望み臨む姿に涙がこぼれる。また派遣される監督や周囲のコーチの熱心ぶり、選手の家族の理解と代表の誇りと、彼ら一人一人の言葉にパワーが宿り、ポジティブな想いを分けてもらえた。

印象的なのは“第三の性”を持つディフェンダーの存在だ。日本では理解しづらい文化であろうが、彼女の「性別ではなく、私は一人のサッカー選手」という言葉はとても嬉しい。

アメリカ領サモアに根付く“ポリネシアンの文化と精神”、それらを大切に尊重していく人々。人口6万人の小さな国の、世界を包み込むような寛大な空気にうらやましさを憶えた。

そして作品のあらゆる場面から、彼らはただただ「サッカーが好き」ということが滲み出ている。きっと「世界一サッカーが好きな代表チーム」ではないかと思う。

2014年W杯に向けた予選で起きた“奇跡”を知って迎えるW杯は、また何か違う感覚にさせてくれるような気がする。(菊池葉月)

『ダーク・ブラッド』（ジョルジュ・シュルイツァー監督 / 2012年）*****

リヴァー・フェニックス再来！彼の没後、初の遺作と聞いて私の心は浮き立った。リヴァーと言えば、ほとんどの人が『スタンド・バイ・ミー』を思い浮かべるだろう。だれもが通る青春の1ページのような甘酸っぱい、彼の若かりし作品である。偶然にも最近、筆者が洋画で一番記憶に残るのは…と考えていた矢先に思い浮かべていた作品である。

それとは対照的な本作『ダーク・ブラッド』は荒れ果てた砂漠にミステリアスな一人の男性（リヴァー）、緊迫した恋愛ストーリー。観終わった後は、何とも言えない虚無感が漂う作品だ。この作品は、彼が急死直前まで撮影されていた作品ということ、また彼自身のプライベートではドラッグに溺れ、奇しくも友人ジョニーデップ経営クラブで23歳という若さで急死したこと、そんな彼の生きざまをも反映してるかのようなこの作品、そんな、色々な思いを浮かべながら観ておきたい作品である。(中井智津子)

お知らせコーナー

第24回映画祭 TAMA CINEMA FORUM

今年の映画祭は11月22日(土)から11月30日(日)までの開催予定です。

現在は映画祭でどんな作品を上映しようかと企画案を練っている段階です。今年の映画祭ではどんな映画が上映されて、どんなゲストが来場するのか…。そして第6回目を迎える日本で一番早い(!?) TAMA映画賞はどんな作品・受賞者に贈られるのか。

皆さん、どうぞお楽しみに！

TAMA NEW WAVE ニュース

第15回TAMA NEW WAVEコンペティションの作品を現在募集中です。

また、昨年のノミネート作品『あの娘、早くババアになればいいのに』が2014年6月7日よりテアトル新宿にてレイトショーで上映決定です。ぜひご覧下さい。

支援会員制度のお願い

当映画祭を一緒に支えて頂ける支援会員を募集しています。映画を「見る人、見せる人、創る人」の交流の場づくりを通じた、地域と日本映画界の活性化に向けて、資金面でサポート頂けませんか。ご支援頂いた方には特典をご用意していますので、ぜひご協力をお願い致します。

〔支援金寄付 個人会員〕

一口1000円

郵便振替番号 00160-5-541123

加入者名 TAMA映画フォーラム実行委員会

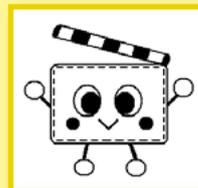
(ご不明な点はお問い合わせ下さい)

特典①: 映画祭チラシ送付

特典②: 映画祭パンフレット贈呈

特典③: 特別上映会割引(当日料金が半額! 2~8月の間に4~5回開催予定)

※その他特典もご用意する予定です。



〔From 編集室〕



(*注意: 今回はシベ超ではありません)

シベ超も舞台版がありますが、シベ超と名前が似ている「シベリア少女鉄道」、略してシベ少と言う劇団があります。

先日そんなシベ少の舞台「あのっ、先輩…ちょっとお話が……ダメ！だってこんなのって…迷惑ですよ？」を見て来ました。

シベ少の舞台は前半でひたすら伏線を張り後半で一気に回収という演出が基本ですが、今回は最初のネタフリがすごくて、すっかりだまされました。作品は文字通りタイトルのままの芝居でした。まあ、このネタは2回は使えないでしょうが。

次回はシベ超ニュースの予定です。

TAMA映画フォーラム実行委員会ホームページ www.tamaeiga.org/

@tamaeiga (最新情報をフォロー) www.facebook.com/tamaeiga (facebookページに「いいね!」で参加)